

## 題目

「改訂自己志向・他者志向エゴグラム MIE の検査特性—2 次因子構造および複数心理尺度間の相関分析—」

## 著者

西川和夫\* \*三重大学

## 掲載誌

交流分析研究（日本交流分析学会） 1996 年第 21 巻第 1 号 pp. 69 ~ 76

## 分類

統計的尺度特性研究

## 問題および目的

はじめに：試作を経て改訂され、一応の構造的安定をみた自己志向・他者志向質問紙エゴグラム改訂 MIE（新称 IUE）の、検査特性を明らかにしようとする。複数の心理尺度と MIE の下位尺度との演繹的および探索的な相関分析を行う。六つの問題設定を行って検証する。

問題 1：MIE は自己志向機能的自我状態 5 因子 5 尺度、他者志向機能的自我状態 5 因子 5 尺度の合計 10 尺度で構成されている。下位尺度間の一部には有意な相関がみられる。下位尺度間相関行列から 2 次因子を抽出し、高次の尺度機能特性を分析する。

問題 2：先行研究において、MIE の下位尺度と杉田の OK グラム（基本的構え尺度）との相関を調べ、予測に適合する対応関係を確認した。本研究では、構造のより明確な改訂尺度に基づき、両者の対応関係を分析する。

問題 3：自我状態間の心理エネルギーを柔軟に移行させる機能を測定する尺度として、水野らによる PC（透過性調整力）尺度が開発されている。MIE の下位尺度にも柔軟な適応機能を反映する尺度が存在する。PC と MIE の下位尺度間相関係数を求め、機能的柔軟性に関与する検査特性を確認する。

問題 4：多次元性格因子尺度として普及している、矢田部ギルフォード性格検査（YG）の下位尺度との相関的対応を検証する。TEG（東大式エゴグラム）と YG の相関、および TEG と MIE の相関が報告されている。いずれも、それぞれの尺度特性に整合した対応関係が実証された。本研究は YG と MIE の間にも、下位尺度特性に対応した相関関係がみられるかを確かめる。

問題 5：先行研究において、心理的ストレス反応およびストレス対処行動と試作 MIE の間に論理的に妥当な関係のあることが報告された。問題 5 では、尺度構造がより洗練された改訂 MIE に基づき、機能的自我状態とストレス関与行動の関係を確かめる。

問題 6：交流分析の特徴の一つに、対人的相互作用に関する下位理論の存在が挙げられる。二者の自我状態間のやり取りは、時に肯定的で健康な対人相互作用を形成し、時には否定的で不健康な関係に陥る。自我状態の機能も、現実適応において肯定的あるいは否定的に作用する。問題 6 では、ホーナイの神経症的人格理論に基づく西平の基

本的対人態度尺度を援用し、自己志向・他者志向自我状態機能との関係を分析する。

## 方法

問題2から問題6では、MIEと他心理尺度との相関を求めている。

問題1：＜調査対象者＞大学生および社会人559名（男227名、女332名）。＜手続き＞MIEの下位尺度得点間の相関表から直交因子（バリマックス解）を抽出した。4因子解が最も明瞭な構造を示した。

問題2および問題3：＜調査対象者＞大学生182名（男48名、女134名）。＜手続き＞OKグラムおよびPC尺度との相関を求めた。

問題4：＜調査対象者＞大学生204名（男56名、女148名）。＜手続き＞YG性格検査の下位尺度との相関を求めた。

問題5：＜調査対象者＞大学生225名（男155名、女70名）。＜手続き＞ストレス反応尺度およびストレス対処尺度との相関を求めた。

問題6：＜調査対象者＞大学生142名（男36名、女106名）。＜手続き＞基本的対人態度尺度との相関を求めた。

## 結果および考察

要約の制約上、概要のみを提示する。

問題1：因子1の負荷パターンはINPとUAが共通の、IFC、IACおよびUACがそれらと対照的な因子成分を共有することが示された。INPとUAは自己と他者に肯定的で情緒的に安定し、外界に開かれた自我機能を呈している。一方負の負荷量を持つIFCとIAC、UACは内向・抑制的で不安定な傾向を表している。因子2におけるICP、IA、UAの負荷は、自己および他者に関して適切な目標設定と対処を行う機能的成分が共有されることを示唆する。因子3に負荷が見られるUNPとUFCは、気楽な親密性を共有成分とする。UCPとUFCが因子4に負荷を有しており、自己意思の表出性が機能的成分になっていることが推測される。

問題2：INP、IAC、UNP、UCPがそれぞれ自己肯定、自己否定、他者肯定、他者否定の構えに最も強く関連することが確かめられた。仮説を支持する結果であり、先行研究の結果とも一致する。

問題3：自我状態尺度MIE（新称IUE）とPCとの相関は、INPとUAが透過性調整力と強く関連し、IACは逆の関係を示している。前者の機能的自我状態は、肯定的な構えとともに、自我状態間の心理エネルギー移行を柔軟に調整する機能を有することが示唆された。

問題4：YGの性格次元表示は、プロフィール表の左欄の表記に準じる。ICPとIAはYGの各性格次元と関連が低い。INPとUAの相関パターンは類似しており、IACのそれとは対照的である。INPはDからCoまでの情緒不安定性因子と社会的不適応性因子に属する性格尺度のすべてと負の相関を示し、逆に外向・適応的なG、A、Sとは正の相関を示す。UAはINPほど顕著でないが、情緒不安定性次元のD、C、I、Oと負に相関

し、GおよびAとは正に相関する。対照的にIACは、情緒不安定性次元と社会的不適応性次元の尺度すべてと強く関連し、外向・適応的なG、T、Sとは負の関係にある。YG系統値との相関を求めると、INPとUAはD系統値とそれぞれ.531、.435の正の相関が得られた。一方IACはE系統値と.698の高い相関がみられ、同時にB系統値とも.495の相関を示す。INPとUAは安定積極的な適応的性格特性を反映し、IACは不安定消極的な不適応的性格特性を反映することが確かめられた。INPとUAは適応的な性格類型を推測する指標になり、IACは不適応傾向の強い性格類型の予測指標になる可能性がある。UACの相関パターンは消極的・抑制的な性格特性が優位なことを示すが、IACほど不安定・不適応的な傾向は顕著でなく、他者からの評価に対する敏感性を表す機能がうかがえる。IFCは主観性尺度0と共通する特性を示す。UCPはAg(攻撃的)と関連する。UFCはUCPとともにB系統値と相関が高く、ともに衝動爆発的特性を呈する。

問題5：ストレス対応についてもINPとIACは対照的な関係を示した。INPは親密な人間関係(H)や柔軟な認知転換(Cd)によるストレス対処が容易な特性を示す。一方IACは状況認知を柔軟にストレス回避的に変化(Cd)させることが難しく、抑うつ(D)や混乱状態(B、C)に陥りやすい傾向を表している。ストレス親和的な機能的自我状態はIAC、UCP、UACであり、ストレス対処的な機能的自我状態はICP、INP、IA、UNP、UA、UFCであった。

問題6：基本的対人態度尺度との相関から、ICPは全体として肯定的な対人態度を表し、INPは積極的で創造的な対人態度を示す傾向がうかがえる。IACは対照的に否定的な対人態度と関連し、自己否定、愛情・承認喪失の疑惑を生じやすい機能がうかがえる。UCPの機能は全体として否定的対人態度に傾くが、興味深いことに、積極性・実行力・指導性といったポジティブな対人機能を発揮する場合と、競争的・権威主義的・攻撃的というネガティブな対人機能として作用する両面性が認められた。UNPは肯定的な対人態度と関連性が強く、愛情深さ・寛容・民主的態度、積極性・実行力・指導性という健康な人間関係形成機能を示す尺度となっている。UAも積極性・実行力・指導性という肯定的対人態度と関連する。UACの相関パターンから、この尺度が表す機能は肯定的であれ否定的であれ、主張的態度とは逆の受動的・抑制的な対人態度が尺度値に反映される傾向がうかがえる。IA、IFC、UFCは基本的対人態度尺度と有意な相関を示さなかった。

まとめ：全体としてICP、INP、UNP、UAは適応的自我状態になりやすく、IAC、UCP、UACは抑圧・攻撃的な傾向を内在させ、不適応に結びつきやすい。UFCは衝動コントロールのあり方が適応性に関連する。IAとIFCは、適応性の側面について部分的に関与する。自己志向自我状態と他者志向自我状態は、必ずしも対称的關係を示さない。

(要約者：西川和夫)